# 3.11 東日本大震災
## 避難者の声（4 月 27 日、農村環境改善センターにて）

### 50 代女性　（相野釜）

夫婦で自宅にいたら地震に遭った。
午後 3 時 20 分ごろ、2 人で自転車に乗って仙台空港に避難した。地元の消防団の広報車が来なかったら避難していなかっただろう。
午後 3 時 50 分ごろには空港に津波が来たと思う。家や車が流されるのが見えたし、黒い色の波だった。
自宅は基礎部分のみ残った。震災後に 2 回ほど見に行った。すべて流された。位牌も流された。せめて位牌だけは見つけたいと思っている。
仙台空港では、夜寒さが厳しかった。2 日目に毛布が配られ、萩の月がたくさんあって食べたのを覚えている。
その後ふたき旅館に移動し、1 週間くらいいて、農村環境改善センターに来た。ここでは、食べ物が温かく、おいしいものが食べられる。
4 月 29 日に仮設住宅入居が決定している。入居できるのはいいが、その後のことがとても心配だ。
名取市に嫁に出した結婚 3 年の娘が地震直後、私たち夫婦がいる家に車で探しに来て、津波に遭い、亡くしてしまった。言葉にならないくらい悲しい。元の場所に戻るのは絶対嫌だ。

### 佐々木　五十美さん（67 歳）（相野釜）

仙台の職場（ホテル仙台プラザ）で地震に遭った。
地震後、歩いて名取市館腰に停めていた自分の車に向かって、2 日間車で生活した。
3 日目の朝、歩いて仙台空港に向かった。家族 3 人（妻、母、長男）と再会できて涙を流した。家族は地震直後、名取の職場から心配で車で駆けつけた長男も含め、かろうじて空港に避難し、難を逃れた。
家族の話では、空港は寒かったし、段ボールやごみ袋を被って寝たとのこと。
この避難所では、料理長をまかされている。疲れが溜まってきているが、食材などの物資は避難者の人脈もあり、たくさん入ってくる。何といっても人脈。人とのつながりだ。
まもなく避難所を去り、仙台に行くつもり。親戚と一緒に住む。避難所に残る人たちの栄養面が心配だが、要望があれば今後も手伝いをしたい。

▲相野釜地区の方々が多く避難した仙台空港ビル1階の様子

### 櫻井　達也さん（23 歳）（相野釜）

3 月 10 日が誕生日だった。
自宅に父と母と 3 人でいたら、生まれて初めての大地震に遭った。
消防団の広報車が来たので、車で午後 3 時前には仙台空港の 3 階に着の身着のままで避難した。
空港ビルからは、自宅が津波で流失したのが分かったし、自分の車が流されていくのが見えた。津波で防潮林が無くなり、海まで見晴らしがよくなったが、一瞬で殺風景な景色と化したのを覚えている。
ここが 3 カ所目の避難所。不足する物資は今のところ特にない。ここには調理室があり、おいしい食事が出てくるのでうれしい。
同じ地区、隣同士の方々で共同生活を送っているので、助け合いながら一緒に生活している。不便は無い。
4 月 29 日に仮設住宅入居が決定している。元の場所に住めるかと言えばそんな状況ではない。また同じような津波が来たらと考えると怖い。
今後、職に就けるかが一番不安だ。

◀避難所となった農村環境改善センター